

「鏡の奥に」

大梅 健太郎

玄関で引越し業者が、ありがとうございましたと言って頭を下げた。横山もつられて頭を下げる。閉まるドアの音に重なるように、ため息が漏れた。

「夜までには、ある程度荷ほどきしなきゃな」

引越してきたばかりの1Kの床は、積まれた荷物で足の踏み場もない。横山は、最低限の生活に必要な物の入った段ボール箱を探した。

洗面台と書かれた箱から、歯ブラシと歯磨き粉、コップ、そして電気ひげ剃りを取り出す。それらを手に、洗面所に立った。一人暮らし用の部屋にしては、鏡が大きい。歯磨きセットを蛇口の右横に、電気ひげ剃りを左横に置く。ふと、妙な視線に気がついた。鏡の中からだ。

のぞきこむと、背後の洗面所の隅に、頭から血を流した若い女が座っていた。振り返っても、そこには誰もいない。もう一度鏡に視線を戻すと、女と目が合ってしまった。つい凝視してしまう。ぼんやりとしていた女の表情に、色がさした。

しまった。

そう思ったときには、もう遅かった。

鏡の向こうの女は、急に鏡に近づき、身振り手振りで何か伝えようとしてきた。鬼気迫る、とはこういうことを言うのかもしれない。

女からゆっくりと目をそらし、洗面所を後にする。

安いと思つたら、事故物件かよ。

部屋に戻つた横山は、とりあえず荷ほどきの続きにとりかかった。

横山は、いわゆる「見える人」だ。靈感というものはわからないが、他人には見えないものをたまに見る。あくまで見えるだけなので、話すことも触ることもできない。

子供の頃は、自分にしか見えないものの存在を恐れていた。しかし、大学四回生の今となつては、もはやどうでもよいものでしかない。そこらへんに転がる石ころのような幽霊よりも、卒論研究のデータ取りが進んでいないことの方が気がかりだ。大学近くのこの単身者用マンションに引越してきたのも、実験に集中するためだ。

しかし、鏡の中というのは今までにないパターンだな。

I Hコンロにヤカンを置き、湯を沸かしながら考える。今までに見たことがある幽霊は、道ばたの通りすがりがほとんどだ。そういえば、部屋の中で見るのも初めてかもしれない。

それではまた来週。

テレビに映る司会者が笑顔で挨拶をする。それを合図に、横山は床から立ち上がった。あくびをひとつ、ふたつ。時計は夜の十一時を指している。

荷ほどきは、日常生活ができるくらいには完了した。引越しの疲れもあることだし、今日は早めに寝ることにしよう。

歯を磨こうとして洗面台に立つ。頭から血を流した女が笑顔で立っていた。手を振り、しきりに何か合図をしてくる。

「まだいるのか」

横山は独り言を言いながら歯ブラシに歯磨き粉をのせた。

女は半袖のTシャツにジーパン姿で、かなりラフな姿をしている。年は、横山と同じくらいだろうか。頭から流れている血は半乾きのようで、短く切られた前髪が、べったりとおでこに張り付いていた。血まみれではあるが、それなりに愛嬌のある顔立ちをしている。

歯を磨きながら、女の挙動を見る。鏡越しだと、まるでテレビのようだ。何度も指で口を示しては、口を動かす。

あ、う、え、え。

お、お、あ、あ。あ、い、え。

読唇術の心得は無いので、まったく理解できない。横山は両腕で大きな×を作り、首を振った。

女の目に涙が浮かぶ。手で顔をおおい、その場に崩れてしまった。

どうすりゃいいんだよ、これ。まるで俺が悪い人みたいじゃないか。

横山はため息をついた。

次の日の朝。カーテンの隙間から入る日の光がまぶしくて目が覚めた。窓とカーテンのサイズが微妙にあっていないようだ。

女のことを思いだし、気が重くなる。えいやつと勢いをつけて起き上がり、洗面台に向かった。

そつと鏡をのぞきこんでみる。そこに女はいなかった。

あれ。いないのか。

拍子抜けした横山は、そのまま髭を剃り顔を洗う。顔をあげた瞬間に女がいるのではないかと思つたが、予想はずれた。

たまたま通りがかつた、浮遊霊の類だったのかな。

安堵した横山は、そのまま身支度をし、部屋を出た。

大学の正面にあるコンビニで朝食のマロンクリームパンを買い、研究室に向かう。学生部屋には同期の宇野気がいた。

「おはようさん。新居は、どないな感じ？」

読んでいた論文の別刷りをパソコンの上に置き、宇野気が尋ねてきた。

「いい感じではあるんだが」

横山はマロンクリームパンをデスクに置き、食器カゴからコーヒーカップを取った。インスタントコーヒーの粉を入れ、ポットのお湯を注ぐ。

「何や、不満でもあるんか？」

「クーラー付き物件を借りたんだが、他にもオマケが付いてきたかもしれん」

「オマケ」

宇野気は腕組みして首をかしげた。

「前の住人が残してた物か？」

「前の住人そのものかもしれない」

横山はマロンクリームパンをかじりながら、鏡の女のことについて説明した。すべて

聞いたあと、宇野気は大げさに自分のおでこをぺちりと叩いた。

「せやから、この物件は怪しいって言うたのに」

「でも、事故物件ナビやその手のブログ、犯罪発生マップで事前に調べただろ」

「それが事故物件の恐ろしいところやな。オマケのオバケ。おーこわ」

なんまんだぶなんまんだぶと、宇野気は目を閉じて横山を拝んだ。

「後で、うちに来てみてくれ」

「何もしないって、約束してくれる？」

わざとらしくしなをつくる宇野気の後頭部めがけ、横山は丸めたパンの袋を投げつけた。

「近くてええなあ、ほんま」

何度も言いながら、宇野気は横山の部屋に入った。

「ほれ、そこだ」

横山は洗面台の鏡を示す。

「うわ」

宇野気のがのけぞる。横山と宇野気の後ろに、昨日と同じ姿をした女が立っていた。

「うわ、うわ、俺にも見えるで。こわっ」

「今朝はいなかったのに」

横山は頭を掻きながら考える。夕方から夜にしか出ないのだろうか。暗い顔をした女は、また指で口を示して口を動かした。

「なんや。何か言いたそうやで」

「それがわかればいいんだが」

あ、う、え、え。

「あ、う、え、え」横山が口真似する。

お、お、あ、あ。あ、い、え。

「お、お、あ、あ。あ、い、え」

何度も繰り返し返し唱える。しかし、どうしてもわからない。

「あかん。母音だけやったら無理や」

「な。どうしていいかわからんだ」

ううむ、と宇野気は腕組む。

「手話、やな。横山は手話でけへんのか」

「無理。それにできたとしても、この女もできるとは限らんだろ」

「ほな筆談や。何か書くもんよこせ」

「こつちからコンタクトをとるのは気がすすまないんだけど。何かあったらどうすんだ」

「大丈夫。この部屋は俺の部屋とちゃうし」

「どういう意味だよ」

横山は紙とペンを宇野氣に渡した。宇野氣は紙に『読める?』と書いて、鏡の女に示す。

暗かった女の顔が、みるみる明るくなる。

「おお、伝わったぞ」

あ、う、え、え。あ、う、え、え。

女は同じ口の動きを繰り返す。

「こつちの言葉は伝えられても、向こうからの言葉がわからんなこれ」

「向こうにもペンと紙くらいあるやろに、使えないんやろか」

ぱくぱくと、横山は口真似を続ける。なんとなく意味が取れそうな気もするが、決めた手に欠ける。

「あ」宇野氣が素っ頓狂な声を上げた。「ええこと思いついたわ」

宇野氣は紙に文字と数字を書く。

『あ↓1 1 い↓1 2 う↓1 3 え↓1 4 お↓1 5 か↓2 1 さ↓3 1』
 鏡の向こうの女に見せて、指で数字を示した。女はこくこくとうなずき、宇野気のやつたようにして、指で数字を示し始めた。

『4 1 3 3 2 4 4 4』

宇野気が言葉に置き換える。

「あかさた、た。あかさ、さしす。あか、かきくけ。あかさた、たちつて」
 背筋にぞわりとした感覚が走る。

女はそのまま数字を続ける。

『2 5 2 5 2 1 9 1 4 1 3 2 4 4』

「あか、かきくけこ。あか、かきくけこ。あか、か。あかさたなはまやら、ら。あかさた、た。あかさ、さし。あかさた、たちつて」

「たすけて、ここからたして。助けて、ここから出して、だな」

「うわあ。これ、めっちゃやばいやん」宇野気が自分の二の腕をこする。「鏡の中に入る頭から血を流した女の人が、助けて、ここから出してつて、どういうこっちゃ」

二人の間に、どんよりとした空気が流れる。

「俺は理系。お前も理系。さて、このようなことは現実に起こることだろうか」

横山が宇野氣に言う。宇野氣は苦笑いしながら答えた。

「説明できるようになって、初めて科学という。つまり、これは科学やない」

「じゃ、なんだこれ」

「なんやろね」

宇野氣は紙に『お名前なあに?』と書いて女に見せた。

「ほかに書くべきことがあるんじゃないのか」

「おっと、気が動転してた」

『私は宇野氣、隣のアホ面は横山と申します』と、宇野氣は書き添えた。

「これ、重要か?」

「人間関係を構築する上で、自己紹介以上に重要なことは無いやろ」

「あれ、人間なのかね」

「さあ」

鏡の中の女は、紙に書かれた言葉を読み、眉をひそめた。そして、何かがはじけたように笑い始めた。

「おお、ウケてるぞ」

「なんでウケたかは知らんけど、関西人冥利につきるわ」

笑いすぎたのか、女の目には涙が浮かんでいる。それをシャツの袖で拭って、指で名前を示した。

「のせ、えみ。やって。どんな字を書くんやろか」

「そこ、気にする必要あるのか」

宇野気は『能瀬、能勢、野瀬、恵美、絵美、江美』と、思いつく限りの漢字を書き、順に示した。

「能瀬絵美さん、ということが判明しましたな」

ああそうか、と横山はスマートフォンを取り出し、名前を検索する。なんらかの手がかりがあるに違いない。

調べてみると、何人か同姓同名の人物が見つかった。

「この中の、誰かなんだらうけれど」

「しかし、そもそも絵美さんはこっちの世界の住人なんやろか」
「え」

確かに。何となく、鏡の中に閉じこめられている印象をもってしまったが、逆に鏡の中の世界からこっちに出て来たがっている可能性もある。

「どっちが夢を？」

横山がそう言うと、宇野気の平手が飛んできた。すんでのところかわす。

「何すんだよ」

「いや、夢かどうか試そと思って」

自分の頬を叩けよと言って、横山は宇野気の尻をぼんと蹴った。

「まあ、まずは情報収集すべきやろな。聞く相手は目の前におるんやし」

そう言うと、宇野気は紙に『そっちには、何か書く物ないの?』と書いて絵美に見せた。絵美は、さっきと同じようにして指で示した数字で文字を綴る。

「動かせない、のか」

絵美の話によれば、鏡の中の世界の物は動かせないのだという。紙とペンもあるけれども、手に取ることができないらしい。

「ということは、食べ物も手に取れないってことなんやろか」

『ずっと食べてない?』

『ずっとたへてない』

『いつから閉じこめられてる?』

『おもいたせないくらいまえから』

『おなか減らない?』

『へらない。ふしき』

むむうと、横山は頭をかかえた。

「これって、鏡の中では時間がたたないってことか」

「いや、時間は経過してるんちゃうか」

宇野気は腕時計を鏡に映す。秒針の動きが、鏡の中の時の動きを示しているように思えた。

「鏡の中の世界へは、鏡の外から干渉することができる。でも、鏡の中では何もできないってことか」

横山はペンを手に持った。鏡の中の横山が、絵美にペンを渡すように突き出す。そしてペンを掴むように仕草で示した。絵美がペンを握ったことを確認し、ペンをはなす。

鏡の中のペンは、鏡の外と同じように床に落ちた。

「今、手をすり抜けよったで」

「どういう原理なんだろ」

「鏡の中って、光を反射してできてる世界やんな」

宇野気の言葉に、横山はうなづく。

「だとしたら、絵美ちゃん以外の鏡の中のものはずべて、動的平衡状態なんちゃうかな」

「わかるように言え」

つまり、と言って宇野気は本を取り出し、ページの端にパラパラ漫画を描いた。

「このコマと次のコマは、まったく同じ絵柄なので、パラパラしても変化がないように見える。でも、まったく別の物。毎回新しく世界が構築されなおしているといえる。一方で、なぜか絵美ちゃんは鏡の外の世界同様、動的平衡状態ではなく、連続して存在している。だからこのコマで絵美ちゃんがペンを握っている、次のコマのペンはもう一度新しく構築されたものなので、絵美ちゃんの握っている空間座標からずれる。簡単にいえば、握れてない。だから次のコマに進むと、ペンはするりと手からはなれて落ちる」

「映画が投影されているスクリーンの前に立つようなもんか」

「光の振動数を考えれば、1秒間に五百兆コマの映画を見ているようなもんやな」

贅沢な話やでと言いながら、宇野気は紙に文字を書いた。

『もう少し実験に協力してもらえる?』

絵美の顔が、少し不安げな表情になる。それでも、うなずいてくれた。

『手を洗面台の上に置いてみて。そして、上から私が歯磨き粉のチューブを落とすけど、動かんといてね』

言われるままに、絵美は手を洗面台の上に置いた。そして宇野気がチューブを落とす。

チューブは絵美の手で跳ねることなく、洗面台の上に落ちた。チューブは絵美の手にめりこんだように見える。

『痛い？』

絵美は首を横に振った。

『手をチューブから抜いて、もう一度チューブにめりこませてみて』

絵美の手は、チューブから抜くことはできたものの、もう一度チューブにめりこませることはできなかった。

「優先されているのはこちらの世界なんやな」

「映し出される映画の中に入りこんだ感じか。気が狂いそうになるだろうな、これ」
もし、自分がこの状態になったら。考えただけで恐ろしくなる。

「あれ？」

宇野気に変な声をあげた。

「どうした？」

「今、絵美ちゃん俺たちの目の前にいるけどさ、物を動かすことはできなくても動き回することはできるんだよな」

鏡の中の絵美は、こちらをのぞきこんでいる。

「そうだな」

「つてことは、鏡に映っていない部分にも行くことができるんやろか。たとえば、隣の部屋の鏡で見ることができるとか」

「なるほど。試してみるか」

横山は洗面台を離れ、部屋の段ボール箱から小さな手鏡を取り出した。

「いいぞ。こっちに來るように言ってくれ」

手鏡を見つめながら、ぼんやりと考える。今朝洗面所にいなかったのは、どこかに移動していたからだろうか。絵美はいつから鏡の中に閉じこめられているのか。そして、外に出ることはできるのだろうか。

「そっちに行つたぞ。見えるか？」

宇野氣の聲がする。鏡をのぞきこんでも、自分のマヌケ面しか映っていなかった。

「だめだ」

横山は洗面台に戻つた。後ろには絵美がついてきていたが、部屋ではまったくわからなかった。

「よく考えたら、ここでこの鏡に映るかどうか試せばええやんか」

「そーいや、そーだな」

横山と宇野気は手鏡をのぞきこむ。洗面台の鏡には絵美が映っているのに、手鏡には映っていないかった。

「どうやらこれは、この洗面台の鏡に特化した事例らしいな」

横山は鏡の表面をゆっくりとなでる。手の表面に、じわりと冷たさが広がった。

「現象は確認できた。次は、理由だな」

その前に、と言って宇野気は紙に五十音表を書き始めた。

「めんどろやけど、後々のことを考えたら、これがあつたほうがええやろ」

絵美は鏡の中で、宇野気を書く表を見つめている。

このへんにいるはずなんだよな。

横山は、手を伸ばして空を切る。当然だが、手応えはない。

「こらこら。セクハラはアカンで」

顔を上げた宇野気が、やらしそうな顔つきで言う。横山の伸ばした手は、ちょうど絵美の胸のあたりに触れそうになっていて、絵美は身をよじって手をかわしていた。

「うわ。ごめん」

慌てて手を引っこめる。宇野気の手書き上げたばかりの表を使って、言葉を組み立てた。

『ごめん』

絵美も真似して、表を指さした。

『いえ、きにしないで』

「濁点、半濁点、読点に句読点。そして小文字もあるから、意志疎通がしやすくなったな」

横山の言葉に、宇野気は満足げにうなずいた。

「さ、話を聞こか」

「まずは、どうやってそこに入ってしまったかだろうな」

横山は紙にそう書いて尋ねると、絵美の表情が曇った。

『わからない。でも、こころあたりはある』

絵美は、自分のおでこをそつとなでた。

『かれしに、あたまをつかまれて、このかがみにぶつけられた』

「うわあ」宇野気の顔がひきつる。「暴力彼氏やん。DVやん」

「それで鏡が割れて、血まみれになったってことか」

横山は自分の頭をわしわしと搔いた。

「んん。この鏡、割れたんやろか。見る限り、ヒビも入ってへんけど」

宇野気が鏡の表面をなでると、きゅきゅつと高い音が鳴る。絵美に聞いてみると、『た

ぶん、われてない』と表で示しながら、首を横に振った。

「鏡の代わりに、頭が割れたってこっちゃな」

「それで、魂のこもった鏡の出来上がり、と」

宇野気が、ははっと気の抜けた笑い声を上げた。「まさに文字通り、DV彼氏の職人技による入魂の逸品やね。ひどい話やでこれ」

横山は、ため息をついた。

「そういった経緯で、魂が鏡の中に閉じこめられた、つまり殺されたってことなのか？」

「でも、事前に調べたときには、そんなニュース見つけられへんかったで」

「不動産屋に、前の住人のことを聞いてみるか」

「そんなん、教えてくれへんやろ」

宇野気は腕を組み、目を閉じた。

「電話、やな」

「電話？」

「そう。まずは絵美ちゃんに自分の携帯番号を聞いて、かけてみよや」

宇野気は絵美から携帯番号を教えてもらい、横山に電話をかけるように促す。

「なんで自分のでかけないんだ？」

横山が宇野氣に聞く。

「もし、DV彼氏が出たら嫌やん。こっちの電話番号が割れるのも嫌やし」

横山は宇野氣の腰を足蹴にしながら、コールを待った。

『はい』

女の声だ。当然ながら向こうからは名乗らない。

「あの、能瀬絵美さんの携帯でしょうか」

『はい、そうです』

耳を近づけて聞いていた宇野氣が、「本人か確認しろ」と小声で囁く。

「絵美さん本人でしょうか」

『……はい。どちら様でしょうか』

「あの。鏡に、鏡が」

『何ですか？』

「か、鏡に頭をぶつけられたことがありますか」

アホか、と宇野氣が横山の頭をはたいた。

『な』

電話の向こうで、言葉が詰まったことがわかる。張りつめた空気が伝わってくる。

『哲也に頼まれたんでしょ!』

怒鳴り声が、耳をつんざく。

「いや、あの」

横山の動揺した言葉を押さえつけるように、『もうほつといてよ!』と絶叫され、電話は切られてしまった。

脱力感が横山を包む。その横で宇野気は紙に文字を書いた。

『彼氏の名前は、てつや?』

鏡の向こうで、絵美はこくりとうなずいた。

「こりや、どういふことや?」

「そりや、絵美さんは死んでないってことだろ」

「じゃあ、この鏡の中の人は誰なんや?」

「そりや、絵美さんだろ」

「せやな、せやせや。うん」

宇野気は笑い声をあげた。横山も、力無く笑った。鏡には、だらしなく笑う二人の顔と、不安げにこちらを見つめる絵美の顔があった。絵美は五十音表を指さす。

『どうしたの? でんわには、だれがでたの?』

困ったね、と横山はつぶやいた。

「真実を告げるべきだと思うか？」

「真実って何や？ こっちの世界の絵美さんは生きてて、彼氏のアホ哲也とは別れてるつて言うんか？」

そりゃ酷やで、と宇野気はひきつった笑顔のまま言った。

『間違い電話をかけてしまった。もう一度かけなおす』

横山はそう書いて、電話をかけるふりをした。そしてしばらくして、首を横にふる。

『出ない。でも、通じたから電話は止められていないみたい』

絵美は、これ以上わかりやすい態度はないくらい、しょんぼりした。そして、表で文字を示した。

『じつかに、ここにいるってれんらくしてくれませんか？』

「無理な話や。鏡の外のこっちの絵美ちゃんは無事なわけやし」

宇野気はそう言うのと、『今の状況をうまく説明する自信がありません。ごめんなさい』と書いてペンを置いた。

紙を一瞥し、絵美はそのまま床にしゃがみこんでしまった。

「可哀想だ」

「でも、どうしようもないで」こんこんと、鏡の表面を叩く。「割ってみるか？」

「簡単には割れないんじゃないか、入魂の鏡だし。それに、もし割れたとしても、失敗したら最後じゃないか？」

確かに、と宇野気はつぶやいて、紙に言葉を書いた。

『今日はもう帰ります。横山のアホと二人きりになったからといって、いやらしいことをしちゃダメよ』

紙を何度もひらひらさせて、絵美に見せようとする。しかし、絵美は顔を伏せたまま、こちらを見ようとしなかった。

「あかん。落ちこませてしもたわ」宇野気はため息をつき、洗面台に紙を置いた。「とりあえず、今日はここまでやな」

「そうだな」

うなずくと、二人は洗面所を出た。

「どうすればいいだろうか」

横山が言うのと、宇野気は「だから、どうしようもないで」と首を振った。

「実物が鏡の中に閉じこめられているわけでもないし、もしもこの絵美ちゃんを外に出してしまったら、こっちの世界に絵美ちゃんが二人おることになってまう」

宇野気はため息をついた。「完全に無視して、何もなかったことにするのが一番ちやうかな」

「お前、ドライだな」

横山が言うと、宇野気は肩をすくめた。

「変にかかわりすぎると、情が移るで」

「情、か」

横山は洗面所を振り返る。ひざを抱えてしゃがみこんでしまった絵美の姿が思い浮かんだ。

「ま、とりあえず今日は俺は帰るわ」

玄関に立った宇野気は、じゃ、と言って出ていってしまった。

ばたん、とドアが音をたてて閉まる。一人取り残された横山は、冷蔵庫から缶コーヒーを取り出した。いつもなら気持ちいい缶の冷たさが、今日は妙に痛い。プルタブを開け、一息にコーヒーを飲み干す。口腔を通し、じんわりと脳みそが冷やされた気がした。

飲むことも食べることも、できないのか。

缶の表面をぐっと押す。スチールの硬さが親指に返ってくる。

持つことも、動かすこともできない。

ゴミ箱に缶を捨て、横山はベッドに腰掛けた。テレビのリモコンに手が触れると、ほとんど反射的にスイッチを入れた。野球中継が映る。

そうか。

横山はリモコンのボタンを見て、字幕と書かれたボタンを押す。ぱつ、と画面に文字が表示された。

そのまま洗面台のところに行く。絵美はさつきと同じ姿勢のままだ。横山は電灯のスイッチに指をかけ、オン、オフを繰り返した。

明滅する部屋の明かりに気がついたのか、絵美が顔をあげる。横山は紙に『見たいテレビない?』と書いた。

視線は微妙に焦点があっていない。絵美はゆっくりと首を横に振った。

横山は部屋に戻り、テレビを担いだ。アンテナケーブルは足りそうだが、コンセントは届きそうにない。一回抜いて、洗面台横のコンセントに差しなおす。そして、鏡を見ながら、ちょうど絵美の正面にくるようにセッティングした。

スイッチを入れると、映像とともに画面に字幕が映った。一瞬、絵美の顔に気が戻る。目は字幕を追っているようだ。しかし、しばらくして視線は下に落ちてしまった。

「つまらないのか？」

テレビに、愛想笑いの芸人が映っている。『何言うてんねん！』緑色の文字で字幕が映る。

「あ」

手元の紙を、鏡に映す。当然、鏡文字に見える。今までのやりとりはすべて、鏡越しだった。絵美は、鏡越しで横山や宇野氣の書いた文字を見ていた。鏡の中、つまり絵美と同じ世界にいる二人を見ていたわけではない。

「ごめん」

横山は部屋から、腰の高さくらいの本棚を持ってきて、鏡の前にすえつける。そして、その上にテレビを置いた。この位置なら、鏡の中からも直にこの画面を見ることができるとは。きるはずだ。

絵美が急に立ち上がり、そしてしきりにうなずいた。テレビのスイッチをつけると、絵美は拍手をした。

鏡の向こうは鏡像の世界。当然、その中にあるテレビも鏡文字を映す。鏡文字ではない、普通の文字を見たかったら、こうやって直接こちらの世界にあるテレビを見ればいい。

実際、絵美は五十音表で『ありがとう』と示し、笑ってくれた。

ひとしごとやり終えた気持ちで、横山は文字を書いた。

『どういたしまして。久しぶりのテレビをゆっくり楽しんでください。チャンネルのリンクエストがあれば、どうぞ』

絵美は、満面の笑顔で七と示した。

「とまあ、そんな感じで」

大学の中庭に設置されたベンチに座り、マロンクリームパンをかじりながら横山は言った。

「当然やけど、全部が鏡文字の世界に閉じこめられてるんやなあ」

右手と左手を交互に見ながら、宇野気はキラルアキラルと呪文のように唱えた。

「こっちの世界と光学異性体の関係にあるんやったら、めちやくちややな。生理活性とかどうなってるんやろ」

「生理活性とかの問題でないだろ」横山は缶コーヒを一口飲む。「そもそも、腹も減らないウンコもしない。傷も治らない世界なんだし」

「そーいやそーうか、と宇野気は両手を合わせた。

「ものを動かせへんのやったら、息もでけへんのとちやうんかな」

宇野気は、合わせた両手を鼻先に近づけ、ふうと強く息を吐いた。

「呼吸運動はしてても、気体の出し入れはできてないんじゃないかな」わざとらしく空気を吸っては吐いてを繰り返す宇野気を横目に、横山はマロンクリームパンの包装紙を小さく畳んだ。

「あかん。過呼吸になりそうや」

宇野気が立ち上がり、ゆっくり息を吐いた。横山も立ち上がり、ベンチのそばにあるゴミ箱に包装紙を捨て、缶コーヒーも飲み干した。

「テレビ以外に、絵美さんの娯楽になるようなものってないかな」

「あとは本とかやるけど、全部鏡文字になることを考えれば、ちよつと無理があるな」
「そもそも、本を持つこともページをめくることができないしな」

「ま、最大の娯楽は」横山の後頭部を宇野気はたく。「お前やるな」
「なんで」

「外界とのコミュニケーションがとれるのはお前だけやん」

「コミュニケーションか」ふむ、と横山は少し考える。「おい、お前の実験生物のカワヨシノボリを分けてくれ」

「家で飼うんか？」

「絵美さんの前に、水槽を設置する」

なるほど、と宇野気はうなずいた。「俺たちに見えるってことは、ほかの動物にも見える可能性があるってことやもんな」

「そう。だからお前のカワヨシノボリをよこせ」

「いや、そんなマニアックなもんより、ふつうに金魚とかの方がええんちゃうか」

「そんなもんかな」

そらそうやと言って、宇野気は理学部棟に向かって歩きだした。「水槽とかエアポンプとか、古くて実験には使えん奴があるから、それを貸したるわ」

「そりや助かりまんねん」

変な関西弁使うなど言っって、宇野気が横山の頭を殴った。

夕方、自分の実験がひと段落した横山は、研究室の共用自転車をこいで近所のホームセンターに向かった。

ペット用品の一角に、水槽が壁一面に並べられている。金魚のコーナーをながめてみるが、どれもこれも女うけするようには見えない。

らんちゆう、でめきん、ししがしら。これのどこが可愛いんだ。

水槽を見つめていると、金魚もこつちに興味があるのか、近づいて来る。口をぱくぱくさせて鰭をふる姿は、何かを伝えたいように見える。まるで、絵美のようだ。水槽に入れられた金魚と、鏡に閉じこめられた絵美。

「こんなことしていいのかね」

意味のないことをしているようで、気が滅入りそうになる。ふと横を見ると、店員がほかの水槽の魚に餌を与えていた。

金魚には食べる楽しみがあるのに、絵美にはそれもない。鏡に触れたときの、ひんやりとした冷たさ。絵美の、ぼんやりとした生気のない顔と、笑顔が交互に浮かぶ。せめて少しでも、気がまぎれてくれれば。

ため息をつきながら、別の水槽をのぞく。

こめっと、りゆうきん、わきん。

金魚すくいによく見る、和金。小柄で可愛い気がする。水槽のガラスに指を近づけると、和金は交互に寄って来た。餌に見えるのか、ガラス越しにつんつん突いてくる。

「すみません」

横山は、店員に声をかけた。

「ただいま」

横山は水槽一式と金魚を手にも、洗面所に入った。じつとテレビを見ていた絵美が、横山に視線を移す。昨日の暗さからは考えられないほど、絵美の表情は変わっていた。こうしてみると、ふつうの女の子と変わらない。

視線が、そのまま水槽に移る。絵美は鏡の中の横山を、ぼんぼんと叩いた。何これ？と言っているかのようだ。

横山は両手で、待ってくれとジェスチャーする。そして、幅三十センチほどの水槽を洗面台に置いた。

絵美が興味深そうに水槽に顔を近づける。横山は水槽に玉砂利を敷き、オオカナダモを植える。その上からゆっくりと水を注ぎ、カルキ抜きを投入した。エアポンプとLEDライトを設置し、最後に和金を五匹泳がせた。

絵美は、両腕で大きな丸をつくり、こくこくとうなずいた。喜んでくれているようだ。鏡に映る絵美の姿を金魚も認識しているようで、鏡越しに近づけた絵美の指をついてくる。それが嬉しいのか、飽きることなく金魚を眺めていた。

「気に入ってくれたようで、よかった」

金魚と遊ぶ絵美の姿を見てみると、じわりと胸のあたりに締めつけられる。可哀想で、

なんとかしてやりたいという感覚。
情が移るで。

宇野気の声が聞こえた気がする。鏡の表面を、ゆっくりとなでる。絵美はこの鏡に顔を叩きつけられたと言っていた。

「俺が、もし」

鏡におでこをつける。冷たさが体に流れこみ、背筋がぞわりとした。